

大田英昭著

『日本社会主義思想史序説』 ——明治国家への対抗構想』

(日本評論社・二〇二二年)

猪 原 透

明治初年以降、とくに自由民権期の先駆的な社会主義受容から大逆事件までの約四十年間を対象に、いわゆる初期社会主義の再評価を試みたのが、本書である。前著『日本社会民主主義の形成——片山潜とその時代』は片山潜という個性的な人物の研究であると同時に、片山の視点を通して明治の時代精神に迫ろうとする意欲的な著作であった。これに続く本書もまた、近代日本の前半期において社会主義がどのように理解され、日本社会に対していかなる影響を与えたのかという大きな問いに、

東洋社会党・片山潜・堺利彦といった具体的な対象の分析と、儒学・社会的キリスト教・帝国主義といった思想的背景の分析を組み合わせることで、答えようとするものである。序章において著者は、日本における社会主義イメージの激しい振幅に触れることから筆を起し、その変遷を大きく五つの時期に分割している。第一期は社会主義概念が受容された一九世紀後半、第二期は社会主義思想の運動化と多様化が生じた一九・二〇世紀転換期、第三期は国際社会主義運動の分裂とナシ

ヨナリズムの高まりの間に揺れた両大戦間、そして第四期と第五期はそれぞれ冷戦中および冷戦終結後である。本書はそのうちの第一期と第二期を分析対象とするものであり、この間における社会主義思想の受容・形成・発展過程の特徴を明らかにすることで、その思想的意義について究明することが目的であるとする。本書は序章を除く全一〇章で構成され、論点は多岐にわたる一方で、論文集という性格から重複する箇所も多い。ただ、著者は序章で本書の具体的な検討課題を四点挙げているので、以下、それらの課題に沿って内容を整理していこう。紙幅の都合上、目次の提示は省略する。また、細かな疑問については内容を整理する中で適宜言及し、最後に本書を通読したうえで考えさせられたことを述べることにする。

本書の第一の課題は、明治初年以降、とくに自由民権期における社会主義受容の検討である(第一・二章)。その際、近世から引き継がれた儒学的素養が当時の社会主義の理解に及ぼした影響と、新聞などのメディアが社会主義をどのように報じたのかという点に焦点が当てられ、この時期における社会主義受容のあり方がその後の社会主義観に決定的な影響を与えたという見通しが述べられている。

儒学が西洋近代の諸思想を受容する際の媒介として機能したこと自体は周知の事柄に属しており、実際、幸徳秋水や堺利彦の儒学的素養に注目した研究は少なくない。ただ、そうした観点から社会主義概念の翻訳や、西周や福地源一郎といった明治初

年から自由民権期に活躍した人物の社会主義理解に向けられることは稀であり、この点に著者の独自性を見ることができらる。著者によると、西周は「社会党論ノ説」において、「経済学」に基づく自由主義経済が「現今は」勝利をおさめたという立場から、社会主義については『孟子』を援用して否定的に論じるのであるが、同時に西の儒学的素養は「経済学」の真理性を相対化させる方向にも働き、「後來的変化固より知る可らず」として社会主義の発展についても一定の含みを持たせたという。著者の指摘通りであるとすれば、儒学思想の二面性——特定の時代・社会制度に強く結びつくと共に、時代を越えた普遍的真理でもある——が、社会主義受容にあたって同時に影響を及ぼしたことになる。もともと、西は国際社会を論じる場合にも、現在は弱肉強食の場だが「一万年先」には恒久平和が訪れるだろうという一種の歴史哲学を展開している（『兵賦論』。主張の力点はむしろ前者に置かれる）、上記の問題も西の思想全体のなかで改めて検討してみる必要があるだろう。

自由民権期において新聞などのメディアが社会主義をどのように報じたかという点については、各新聞の性格（政府や政党との距離）との関連や、論争を通してそれぞれの立ち位置が定まってくる過程を丁寧に分析している。ここでも福地源一郎ら新聞人の儒学的素養が、社会主義の理解にあたって肯定・否定の両面で影響を及ぼした可能性が示唆されている。これに加え、一八七八年に二度起ったドイツ皇帝暗殺未遂事件の犯人が

「社会党」であったという認識が、この時期の社会主義理解に与えた影響についても詳しく論じられている。活動実態をほとんど持たなかった「東洋社会党」が当時大きな注目を集めた背景を上記の視点から明らかにしていることも、本書の功績として挙げられよう。もともと、こうした自由民権期における受容のあり方が「後の社会主義観に決定的な影響を及ぼした」（一七頁）とまで言えるかどうかは、さらなる検討を必要とするように思われる。

第二の課題は、キリスト教を通じた社会主義受容の再検討である（第三・四章）。日清戦争後に結成された社会主義研究会や社会民主党においてキリスト教徒が大きな存在感を發揮したことはよく知られているが、それに先立つ一八八〇年代のキリスト教徒の社会主義理解が分析対象となる。先述したドイツ皇帝暗殺未遂事件や、一八八一年のロシア皇帝暗殺事件の影響により、日本のキリスト教徒にとっても社会主義は当初「邪説」に他ならなかった。しかし、こうした認識は八〇年代を通して徐々に変化していき、九〇年ごろまでにはキリスト教の理想と社会主義を直接重ね合わせる解釈が力を持つようになる。著者はこうした変化を、D・W・ラーネットや浮田和民、横井時雄、小崎弘道、植村正久、竹越与三郎といった人々を通して検証している。

キリスト教徒の社会主義観に対して、同時代のアメリカにおける社会福音運動が与えた影響を明らかにしている点は、本書

の日本思想史に対するとくに重要な貢献である。前者においても著者は、片山潜が社会福音運動やそれに科学的裏づけを与えた初期シカゴ学派の社会学から影響を受けたことを指摘している。本書でもその点が改めて確認されるとともに、その影響範囲は片山に限られず、広く深いものであったことが示される。

専門科学として確立される途上にあつた当時の社会学は、経済的自由放任主義への批判として現れた「新学派」の経済学および社会福音運動と密接な絆で結ばれ、社会改良運動の最前線に立っていたのだという。評者が専門とする社会科学史研究の立場からみても、自由民権期のスペンサー社会学から一足飛びに明治後期の建部社会学へと移る一般的な日本社会学史に対し、その間に挟まれたキリスト教的な社会学の重要性を示唆しているように思われる。

第三の課題は、一九・二〇世紀転換期に社会主義が、本書の副題にもあるように「明治国家への対抗構想」として整序されてゆく過程を明らかにすることである(第五・六・七章)。具体的には、和田垣謙三らによる社会政策学の移植、社会政策・社会改良論と社会主義の分化、社会主義の実現には「革命」が必要であるという立場の確立、そして伝統的な社会関係の解体に伴うアノミーへの危機意識が社会主義思想の形成に及ぼした影響、といった論点を取り上げられる。前著と共通する論点・主張や、前著の簡潔な要約と見られる箇所も多いが、とくに第七章で取り上げられている堺利彦の「家庭」論は、社会改良論か

ら社会主義への移行に関する研究として興味深い内容である。

堺が「家庭」の改良に大きな関心を寄せたことは、たとえば彼が箱膳に替えて「ちゃぶ台」を推奨したというエピソードと共に比較的よく知られた事柄ではある。本書の独自性は、堺の「家庭」論の时期的な変遷を詳しく分析することで、それが社会改良論から社会主義への移行を促す媒介になったことを明らかにしている点であろう。堺にとつて都市中産階級の中から生まれつつあつた「家庭」すなわち西洋的な Home は、来るべき新たな社会秩序の根底に据えられるものであり、「家庭」の対等・平等な社会関係を広げていくかたちでの社会改良が当初は想定されていた。しかし、堺はやがて「家庭」内部での階級的抗争の存在に注目するようになり、そのことは社会主義に関する堺の認識を新たに示したという。このような著者の指摘は、「革命」と「家庭」のあいだで板挟みになつた果てに転向を余儀なくされた多くの社会主義者とは異なり、堺が息の長い活動を行うことができた理由を考へるうえでも、重要であると考えられる。

ただし、著者は堺の「家庭」論が大日本帝国のイデオロギーである「家族国家」観とは異なるものであることを強調するたため、「堺は親密性を広げるべき「社会」の領域を「国家」に限定しな」かつたと述べているが(一一八頁)、十分に論証されているとは言い難い。たとえば著者は堺の『家庭の新風味』を引用し、「我々は神の子を我が子として産むのである」「それ

〔子供〕が如何なる職分をもつて次の時代に働くかは、到底我々の考へおよばぬ所」であると述べていることに注目し、キリスト教徒でない堺が「神」という超越的価値を持ち出すのは、子供を産み育てる親の責任が「現時国家に対する忠良な国民をつくることには限定され得ない」ことを説明するためだと指摘する（一七五頁）。だが、著者が省略した箇所では「目の見えぬ片輪者」も按摩として多くの人の役に立つかもしれない、「何と云ふほどの事のない一婦人」も子孫に立派な人物が生まれるかもしれない、と述べているのであって、そこに「現時国家」とは異なる価値が生まれることへの期待を読み込むことは難しいのではないだろうか。評者はむしろ、この時期の堺の「家庭」論が対等・平等な人間関係を志向するものであった背景に「国民主義」的な発想を読み込もうとする梅森直之の主張に、より強い説得力を感じている（二十世紀の少年からおぢさんへ」、小正路淑泰編『堺利彦——初期社会主義的思想圏』論創社、二〇一六年）。

なお、先述した第一の課題とも関連するが、「孝」の倫理にあえて背を向けて平等な人間関係を志向した堺利彦の「家庭」論と、彼の儒学的素養との対応（あるいは非対応）関係についても掘り下げた検討が行われていれば、「儒学を媒介とする社会主義観から、キリスト教を媒介とする社会主義受容への転換」が生じたとする段階論的な把握とは異なった（一七一—一八頁）、より重層的な思想史像が描き出せたように思われる。

第四の課題は、社会主義運動が帝国主義への批判においてどれだけ思想的深度をもつたのか、またその限界は何であったのかを解明することである（第八・九・一〇章）。主に日清戦後の労働運動家や社会主義者を対象に、彼らのなかで社会問題・労働問題への認識と帝国主義への認識が、どのように結び合いながら論じられたのが、『労働世界』紙の諸論説や日露戦争前後における非戦論の展開などを素材として分析される。労働運動に携わる者も多くは軍事力による大日本帝国の拡大・発展を歓迎したが、同時に政府の軍備拡張には反対したという著者の指摘を敷衍すれば、そこには徴兵制や国家の発展の恩恵が偏った形で配分されることを問題視する「国民主義」的な論理が存在すると言え、そこから距離をとって中国人労働者の受け入れを進めようとした片山潜は『労働世界』紙においても孤立することとなった。非戦論もまた、帝国主義に圧迫される被圧迫民族の姿や、彼らとの連帯の可能性が視野に入らないという点で限界を抱えたものであったという。著者はこうした一般の傾向に対する例外として木下尚江と田添鉄二を取り上げるのだが、彼らも「思想の段階」に留まったことが強調され、「現実との格闘」を通して思想が鍛えられるのは一九二〇年代を待たねばならないとされる（二六九頁）。

以上、本書の内容を概観してきた。日本思想史に対する本書の貢献や細かな疑問については既に述べたので繰り返さないが、本書が多くの課題に取り組んだ意欲的な著作であることは明らか

かになったであろう。その反面、それぞれの課題がどのように関連し合い、全体としてどのような思想史像を打ち出そうとしているのかは、かえって見えにくくなっているように思われる。本書の序章では社会主義イメーজの展開が整理されているが、むしろ社会主義思想史研究の展開と到達点・問題点の整理を行い、それを踏まえて問題点を克服するための具体的な分析対象として以下の課題を取り上げる、という手続きを踏む必要があるのではないだろうか。また、史料の引用方針が一貫していないことも気になる点である。複数の章で同一史料・同一箇所が引用されるのは行論の都合上やむを得ないとしても、一度目は片仮名で、二度目は平仮名で引用されるのは(三頁・二八頁)、正当化しがいように思う。

本書の全体から受ける印象という面からさらに付言すると、評者はこの時期の労働運動・社会主義思想における移民論の重要性に改めて気づかされた。本書では、人口増加の圧力を緩和し同時に「日本人種の勢力」を拡張するための手段として海外移民を奨励した竹越与三郎をはじめとして、渡米移民事業を奨励した片山潜、経済的利害に基づく自由移民を帝国主義に対抗する潜勢力とみた田添鉄二など、実に多くの人物が移民問題に関心を寄せたことが紹介されている。そこには、マルサス主義に関する知識、過剰人口問題の解決策として帝国主義を掲げる社会ダーウィニズムの流れ、そして明治国家の制度化に伴う閉塞感を打ち破るための「海外雄飛」への欲求など複数の背景を

想定することができるが、それだけに同じ社会主義者の移民論でも具体的な内容は多彩である。ただしその妥当性や同時代的な位置づけ、社会的影響については意外なほど検討が進んでおらず、著者のいう「第三期」以降の展開も含めて研究が進むことを期待したい。

以上、評者の関心に引き寄せたうえでの内容紹介と批評を行ったが、本書が社会主義思想史を専門としない者から見ても刺激的な著作であることは間違いない。著者の研究が順調に発展し、遠からず日本社会主義思想史の「通史」が書かれることを待望する。

(関西学院大学非常勤講師)